中野区教育委員会会議録　平成２３年第２回臨時会

○開会日　平成２３年７月２９日（金）

○場　所　中野区教育委員会室

○開　会　午前　１０時０１分

○閉　会　午前　１１時５８分

○出席委員（５名）

中野区教育委員会委員長	山　田　正　興
中野区教育委員会委員長職務代理	高　木　明　郎
中野区教育委員会委員	大　島　やよい
中野区教育委員会委員	飛鳥馬　健　次
中野区教育委員会教育長	田　辺　裕　子

○出席した事務局職員（５名）

教育委員会事務局次長	村　木　　誠
副参事（子ども教育経営担当）	白　土　　純
副参事（学校教育担当）	宇田川　直　子
指導室長	喜　名　朝　博
統括指導主事	杉　山　　勇

○担当書記

子ども教育経営分野	落　合　麻理子
子ども教育経営分野	仲　谷　陽　兵

○会議録署名委員

委員長	山　田　正　興
委　員	高　木　明　郎

○傍聴者数　　０人（非公開）

○議事日程

〔協議事項〕

（１）教科書採択について

中野区　教育委員会
第２回臨時会
（平成２３年７月２９日）

午前１０時０１分開会

山田委員長

おはようございます。

ただいまから、教育委員会第２回臨時会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、高木委員にお願いいたします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりです。

本日、事務局職員は、協議事項の教科書採択に関係する職員として、次長、子ども教育経営担当、学校教育担当、指導室長に出席をお願いしておりますので、ご了承ください。

また、教科書採択にかかわる職員として、統括指導主事に出席を求めておりますので、ご了承ください。

それでは、日程に入ります。

＜協議事項＞

山田委員長

協議事項「教科書採択について」の協議を進めます。

ここで、委員会運営について確認いたします。

教科書採択に関する教育委員会の審議過程につきましては、中野区立学校教科用図書の採択に関する規則第10条の規定に基づき、採択が行われる日の前日までの間は非公開とすることと定められています。７月27日の第１回臨時会で確認しましたとおり、本日の臨時会も非公開とさせていただきます。

（平成23年第22回定例会において公開の議決がされたため、以下の非公開部分を公開）

山田委員長

それでは、前回から本日までに教育委員会及び教育委員あての要望書などについて届いていましたら、ご報告をお願いいたします。

指導室長、お願いいたします。

指導室長

それでは、前回の臨時会から本日までに届いた要望書についてご報告をいたします。お手元に資料がございます。４件の要望書等が届いてございます。

１件目、７月27日付、教科書問題を考える中野区民連絡会より。２件目、７月27日付で

ございますが、個人の方からのお手紙。３件目、７月28日付、都教組中野支部九中分科会より。４件目は同五中分科会よりでございます。内容につきましては資料をご確認いただきたいと思います。

以上でございます。

山田委員長

それでは、前回に引き続き、協議を進めたいと思います。

それでは、本日は、地図から協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからのご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、高木委員からお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

高木委員

教科用図書の地図に関しましては、帝国書院と東京書籍の２社からでございます。帝国書院のものは、若干幅がある大きいところなので、まず、これをどう判断するかというところもあるのですが、それはちょっと置いておいて、内容から見ますと、まず、帝国書院のほうですが、アジア、オーストラリア、北極という19ページ、20ページのところで、通常ですと、ユーラシア大陸だけのところが、グリーンランドですとかカナダ、北極点も入って、オーストラリア、地球が丸いことですとか、例えば、東京からイギリスに行くよりはグリーンランドのほうが距離的には近いとかというのが実感できて、これは非常にわかりやすいのではないかと思っております。

あと、29、30ページの東アジアと日本というところで、通常の世界地図とは違って、大陸側から日本を見た地図が載っているのですが、これを見ると、日本もアジアの一部なのだなとすごく実感させられるとともに、中国や韓国の方から見ると、つながっているではないかというような、自分たち日本人とは逆の立場から見られて、これが載っているのはすごくいいのかなという気がしております。

あと、ちょっとページ数が出てきませんが、東京の紹介の地図のところで、中野の平和の森公園ですとか、江古田の森公園ですとか、サンプラザですとか、哲学堂とかがしっかり載っていますので、中野の子どもたちにとっては「あっ、載ってる」ということですごく親しみが持てるのではないのかなと。

東京書籍の地図帳も充実していて非常にいいのですけれども、教科書が普通サイズということで、基本的には100万分の１なのですが、物によっては200万分の１とか、400万分の１とか、若干大きさが違っているところが出てくるので、できればこれは同じほうがいい

のかなと。あと、幅にして何センチかの違いなのですが、幅が大きい分だけ帝国のほうが地図という点で言うと見やすい。通常の教科書ですと、ずっと机に出しっぱなしで使っていきますので、やはり通常サイズがいいと思うのですが、地図に関しては、授業中ずっと出しているということではないと思いますので、小学生ですとちょっと大きいかなという気はするのですが、中学生ですと、若干大きくて持ち運びが不便ということを差し引いても、地図に関しては帝国書院を私は僅差でお薦めしたいと思います。

以上です。

山田委員長

続きまして、大島委員、お願いいたします。

大島委員

私も、内容的に、今高木委員がおっしゃったことを聞いてもっともだと思うことと、それにつけ加えまして、以下のような点に着目しまして、結論的には帝国書院のものを推薦したいと思うのです。

その一つは、まず、地図の色が、帝国書院のものは非常にはっきりしている。例えば、山のところの緑とか、平地の黄色、ベージュの色とか、山のところの茶色とか、そういう色分けがくっきりしているのに対して、東京書籍のものは全体にぼやけているという点。

それから、これは大事だと思うのですけれども、縮尺の点で、今、高木委員のお話にも出ましたけれども、帝国書院のものは100万分の１ということに縮尺サイズが統一されております。東京書籍のものは、100万分の１とか、200万分の１とかありまして、その辺が、同じ縮尺で見ると比較もしやすいですし、縮尺がばらばらだとイメージが混在してしまってわかりにくいというような点もありまして、その点も帝国書院がいいのではないか。

それから、サイズの点ですけれども、東京書籍のものは判が若干小さい。帝国書院が大きいということで、やはり地図ということを考えると、判が大きくて図も大きいと、高木委員のお話にもありましたように、広い範囲を写し出せるということもありますし、地図という点からすると広い版、大きい版のものがいいのではないかということ。

それから、東京書籍のものは、巻末のほうに「資料編」ということで資料がまとまっているのですが、それはそれで大変充実した資料でいいと思うのですけれども、使うときに、地図のほうと資料のほうと、行ったり来たりしなければならないというのがちょっと使いづらいのではないかと思われる点などもあります。

それと、帝国書院は、例えば61ページに円錐図法の説明が載っていますが、円錐図法は

ひずみが小さいとか、そういう細かいところでの地図に関する知識なども随所に載っていまして、専門的なところまで取り上げているというところもいいのではないかということで、私は帝国書院のものを推したいと思います。

以上です。

山田委員長

続きまして、教育長、お願いいたします。

教育長

社会は、学習指導要領の改訂の趣旨の中で、地図や地理に関することで言いますと、日本の諸地域及び世界の諸地域の地誌学習を充実させるということや、資料を選択し、活用する学習活動及び作業的・体験的な学習活動を重視するというようなところがポイントであります。そうしたところを見てみますと、東京書籍も、帝国書院も、そういった趣旨を踏まえてバランスよく配置されているのではないかなというふうには思うのですけれども、私も、今、お二人の委員の方々からご説明がありましたように、帝国書院のほうがより使いやすく、学習にふさわしい、指導しやすい地図になっているのではないかなというふうに思っているところです。

例えば、地図の並べ方などで多少教科書と違う配置があるというのが東京書籍であったり、アジアからではなくユーラシア大陸から始まっているというようなことですとか。それから、帝国書院のほうは、朝鮮半島や台湾、あるいは中国が詳しく、日本に身近な近隣国との関係がわかりやすいというようなことがあります。

それから、大島委員もおっしゃっていらしたのですけれども、東京書籍のほうは「資料編」ということでかなり詳しい資料がついているだけでなくて、日本の領域に入ってからも、ページごとに幾つもの資料が入っていて、この地図帳だけではなくて、公民ですとか歴史の資料集などと重なるところもあるというふうな資料も結構あるように見受けられまして、その分、煩雑で使いにくいのではないかなという気がしています。それに比べて、帝国書院のほうは、判が大きいということもあるのでしょうけれども、すっきりしていて、整理をされていて、見やすく使いやすいというようなことがありますので、帝国書院のほうを推したいというふうに思います。

以上です。

山田委員長

それでは、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

地図の大きさは、私もこの大きいほうの帝国がいいと思います。美術と同じ大きさですけれども、細かいことがよく見えるということで、いいなと思います。あと、縮尺の問題も、さっき、高木委員が言われたとおり。それから、写真が帝国は非常に多くて、それから、子どもが地図の等高線とか段彩の色彩だけではなかなかわからないところは、鳥瞰図があるとイメージしやすいと思うのですね。地図としての地形というか、それのイメージがいいのではないかと。これをたくさん使っているのでいいなと思います。

あと、帝国は割と昔からそうだと思うのですけれども、歴史的なものもなるべく地図帳に入れようというので、特に110ページは江戸の地図が載っていまして、かなり大きい地図があるのですね。93ページは、大阪もあるのですが、これはちょっと小さいのですけれども、元禄時代のものが載っていたり、そういう歴史的なものも取り組まれているというのがあります。

それから、帝国の116ページに、気仙沼付近の漁業ということで、カキの養殖とか、ホタテとか、ほとんど昔のような形で載っている。それはあったほうが津波でこうなったんだよという授業に使いやすいのかもしれないし、ないと、なくなってしまうということで、これは教科書会社は書きづらいと思うのですけれども、あればあったで意味があると私は思うので、いいと思います。

帝国の127ページ、日本の地形の周辺の地理のところに地震のプレートが載っていまして、それもいいなと思いました。

東京書籍のほうも、92ページに大変すてきな都心のイラストがあって、建物とかがわかりやすく書いてある。これもいいなと思いました。93ページのほうの東書の東京の地図も割とすっきりしていいなと思いました。

それから、123ページには日本の地震・火山・津波という地図がありました。どちらも特色があっていいなと思いますが、全体的には帝国書院を一番に推したいなと思います。

以上です。

山田委員長

最後に私のほうからです。

社会は、地理、歴史、公民という教科の中で、広い視野に立って社会に関する関心を高めて、資料に基づいて多面的・多目的に考察し、というような形で書かれておりますので、地図はどうしても資料編としていろいろ使うということで、東京書籍、帝国書院とも小学

校からの指導の連続性についてはどちらも導入部門ではしっかりできているかなというふうに思います。

多くの委員がご指摘されましたように、教科書としての大きさですけれども、地図ですから、大判であってもさほど苦にならないというような指摘もあります。また、多くの委員がおっしゃっていますように、全体的に帝国書院のほうが色がはっきりしていてわかりやすいとか、縮図が原則として100万分の１に統一されているということで、子どもたちにとって学びやすい教科書という視点では、帝国書院のほうが少しわかりやすくできているのかなと思います。

また、教育長からお話ししました東京書籍、ほかの委員も申しておりましたけれども、資料集が非常に詳しく載っています。この点については意見が分かれるところではないかなと思いますが、ほかの教科書の中の資料とも重なる点もあるということで、どちらもすばらしい教科書ではあると思いますけれども、総合的に見ますと、帝国書院のもののほうが使いやすいのではないかというふうに思いました。

私からは以上でございます。

ほかにご発言はございますか。

（発言する者なし）

山田委員長

ありがとうございました。

委員の皆さんの意見をお伺いして、教科書採択の基準からしますと、帝国書院が最適であると思います。地図につきましては、帝国書院を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

山田委員長

ご異議ございませんので、地図は帝国書院を採択候補とすることにいたします。

次に、数学についての協議を進めます。

初めに、各委員からそれぞれのご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、大島委員からお願いいたします。

大島委員

数学につきましては、東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、啓林館、数研出版、日本文教出版というたくさんのところから出ております。私は、自分が数学が大変苦手だ

ということもありますので、やはり導入のところでわかりやすく導入しているということがありがたいなと思いまして、そういう点に着目して見てみました。

具体的には、１年生の「方程式」の章のところと、同じ１年生の「文字と式」という章、そこの点に特に着目してみたのですが、例えば「方程式」の章の一番初めの導入のところで、教育出版、大日本図書、学校図書、数研出版、文教出版などは、説明がすごく少ないか、ほとんどなくて、いきなり式のほうに入っているというようなことで、学習内容のイメージがつかみにくかったと感じました。啓林館は、ある程度導入部があるのですが、その点、東京書籍は大変丁寧に導入しているという印象がありました。大量のボトルキャップの重さをはかるという例が出ているのですけれども、そのボトルキャップも日常なじみがあるものを使っていまして、なじみやすいところからイメージもわきやすいといいますか、数学のほうに入っていきやすいというふうに感じました。

それから、「文字と式」のところの導入部なのですけれども、例えば啓林館は、紙とマグネットと黒板というものを使いまして、ある程度初めの導入部をやっていますが、数研出版などは導入部が全くなし、いきなり数学的な「文字と式」のほうに入っていっている。大日本図書もマグネットを使っているのですけれども、ちょっとイメージがわきにくい。教育出版もストローの三角形を使ってやっていたり、学校図書も導入にストローの図があります。文教出版はマッチ棒を使って導入している。導入部はあるのですが、学校図書とか文教出版の場合は、その図がかいてある同じページに既に式が書いてある。式が書いてあるということは、この図から、数学としてはどういうことを導くのかというその式のところを考えさせるというワンステップがなくて、もう既に使う式がそこに出てきているということです。ワンクッションを置いて、そういうストローだとかマグネットだとかマッチ棒とかというところから、どういう数学的な世界に入っていくのか、どういう式になるのかという、そこはまず頭で考えさせるというようなステップが大事ではないかと思いまして、いきなりその答えが書いてあるというよりも、次のページをめくらないと書いていないというような構成になっているものがいいのではないか。

そういう点で言いますと、東京書籍のものは、マッチ棒を使っているのですけれども、まず具体的なもの、次に、マッチ棒をちょっと図形化した半分具体的な図、それから、もっと抽象的な思考にというふうに段階を追って丁寧に説明があってイメージがしやすい。数学の世界に入っていきやすいのではないかということと、次のページをめくるまで自分でそれを考える余地があるようになっている。これは一つの例なのですけれども、全体的

に東京書籍のものがそういう具体的なものから抽象的なものへと、導入のところが大変わかりやすくていいのではないかというふうに思いました。

それから、スパイラルといいますか、振り返りのことについて。例えば大日本図書のものなども、70ページに基本問題というのがあるのですけれども、発展的な問題というのはどこか別のところにあるのだと思うのです。ちょっと見ても、どこにあるのかはよくわからなかったのですけれども、東京書籍のものは、基本問題があって、応用があって、発展というふうに、順に難しい問題が並べられて出てきていて学習しやすいのではないか。また、戻るページ数も右側に書いてあるというようなことで使いやすいのではないかと思いまして、以上のようなところから、東京書籍のものが使いやすく学びやすいのではないかというふうに感じましたので、推薦したいと思います。

以上です。

山田委員長

次に、教育長、お願いいたします。

教育長

数学は、これから情報化社会にどんどん進んでいくわけで、そういう意味でもとても大事な教科だと思うのですけれども、生徒一人一人で個人差もあらわれやすい教科なので、繰り返し繰り返し振り返って教えていく、あるいは学んでいく、あるいは自分で教科書を見ながら自学自習というようなこともできるような、そういう教科書が必要なのではないかなというふうに考えています。

そういうことを考えていったときに、７社あるわけですけれども、東京書籍と大日本と啓林館がそういう趣旨を踏まえたバランスのよい教科書ではないかなというふうに感じました。ただ、その中でも、例えば大日本図書で言いますと、今大島委員も言われましたように、練習問題と答えが見開きに掲載されていて、子どもたちに実力がつきにくいというようなことですとか、導入に当たって例示の写真が少な過ぎて思考が発展しにくい場面があったり、あと、巻末の資料で練習問題などが補われているところはあるのですけれども、ページが離れていて使いにくいのではないかなというふうな印象を持ちました。

また、啓林館につきましては、巻末に小学校からの振り返りがあって、丁寧に対応されていたり、ノート指導のページがあり、また、題材や素材が豊富にあるということで、思考が発展するのではないかなというふうには思っているのですけれども、絵が多くて写真が少ない場面が結構あって、絵だと理解がしにくい場面があるのではないかという印象を

持ちました。

その点、東京書籍については、まず、教科書の使い方のページが丁寧でわかりやすいということと、「マイノート」というページがあって、ノート指導の説明がある。あるいは、レポートということで、レポート活動などが丁寧に説明されている。それから、小学校からの振り返りですとか、繰り返し学習ができるようなスパイラルな取り組みができるものというようなことも指導の中にありました。そういう意味では、家庭学習であったり、経験の浅い教員・職員が指導するにも支援されやすい教科書ではないかと思いまして、東京書籍が一番よいのではないかと考えました。

以上です。

山田委員長

では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私も、皆さんおっしゃっている東京書籍、大日本図書、啓林館の三つの中ぐらいかなと思っています。今使っている大日本図書は、教科書そのものが見開きで使いやすくなっていると思うのですが、今、左側のほうのページに、興味を持たせるのか。まず問題の設定みたいなものがあって、その次に基礎・基本みたいに押さえるところが出てきて、右のページにクエスチョン１、クエスチョン２、最後にプラス１ということでもうちょっと違う問題が出てくる。そういう編集をしているようなのですけれども、何か工夫が足りないかなと。もうちょっと子どもに具体的なものでわかりやすくなるといいなという気がしないでもありません。いいところは、「マスフル」というのか、数学がいっぱいあるよみたいな、読み物風になっている。あれはいいなと思いますけれども、数学なのでそれだけでうまくいくのかなと。あと、伝え合うといいますか、コミュニケーション活動というのも重視してあるのですが、いまいちかなという気がしないでもありません。

それに対して、東京書籍と啓林館のほうは、１年生の最初の「正負の数」、マイナスというところを見てもわかるように、子どもがわっと驚くような、興味を持ちそうな写真とか。この東京書籍は上手ですね。サッカーの得失点がマイナスで出てきたり、石川遼さんがゴルフで出てきたり、子どもが喜びそうな写真があって……。ほかの出版社も工夫はしているのです。多くは、気温の変化で「マイナス」とかあるのですが。啓林館も工夫していますけれども、子どもがどれに興味を持つか。そういう意味では教科書会社もいろいろ工夫しているなと思います。

ということで、身近な具体的な題材を扱っているというのでは、啓林館も東京書籍もあると思うのです。あと、東京書籍は「マイノート」というのがよかったり。それから、課題を説明するのに文章とか文字、数字だけではなくて、視覚的に何かとらえようと、そういうところがいいなと思います。

啓林館のほうも同じようなことが言えるかなと思うのです。基礎・基本が定着するように、豊富な既習事項とか、小学校の振り返りとかというのをたくさん入れているところ、そんなところがいいなというふうに思います。啓林館も比較的とりあえずの工夫はされていると思うのですけれども、あとは全体的な見た感じということで、東京書籍でも啓林館でもどちらでもよろしいかなと思いますが、強いて言えば東京書籍でいいかなと思います。でも、そんなに固執しません。どちらでもよろしいのかなと思います。

山田委員長

次に、高木委員、お願いいたします。

高木委員

数学に関してはたくさんの出版社から出ているのですが、今までの委員からご説明があったことに私も基本的には賛成で、東京書籍と啓林館、どちらかがいいかなと思っております。本区では、数学に関しては習熟度別が導入されておりますので、それを考えると、まず、基礎基本がしっかりできる教科書を選ぶべきなのかなと。あと、中学を卒業して高校を出て、大学、短期大学に入って――大学、短大に入ると数学は余りやらないのですけれども、今、就職をするときには、ＳＰＩ２という試験を皆さん受けさせられて、しかも、その数学的内容のところは小学校６年から中学校ぐらいの基礎・基本の問題なのですね。うちの短大生にもやらせるのですが、意外とできないのです。私の長男が今中学校１年で、ちょうど「正負の数」ですとか加算減算をやっているのですが、数学ができない子はここでつまずくのですね。マイナスとプラスを足すというイメージがどうしてもつかめない。それを考えると、この２社は、基礎・基本の定着という点では非常にわかりやすい展開になっているかと思います。

両方ともいいのですけれども、どちらかというと、私も、数学の「マイノート」――今、大学生でもアカデミック・スキルということで、ノートのとり方というのをうちの短大でもやっているのですが、４年制でもノートをとれない学生が多いので、初年次教育で教えるところが多いのです。そこを中学校１年生のところでしっかり教えてあげるというのは非常に大切だと思うので、東京書籍を第一候補としたいと思います。

山田委員長

では、最後は私です。

数学でございますけれども、今、日本の子どもたちは理数離れが進んでいるということもあって、今回、この教科書は７社という非常に多くの教科書会社がつくっています。数学ですけれども、内容的には、今までの数と式、図形、数量関係から、新たに関数とか資料の活用ということで、数学的活動を指導内容として取り上げていく。これは、今までの数学をもとにして、数や図形の性質などを見出す活動について、そういったところの活動がやりやすいような教科書になっているか。それが言語活動や体験活動などに結びついているか。一方では、数学は繰り返しということになりますので、いわゆる反復性、スパイラルというものが重視されているか。こういうところに着目して教科書を見ていきました。

多くの委員がご指摘のとおり、７社出ているのですけれども、小学校との連結ということを考えますと、例えば導入のところでは東京書籍とか啓林館とか比較的書かれています。数研出版の最初に小学校の算数の学習を振り返るページが設けられているというのは、子どもたちに教えやすいのかなというふうに思いました。一方で、日本文教出版は、導入のところの具体例が少し少なくてちょっとつまずいてしまうのではないかというところと、日本文教出版はイラストが少し幼いのかなという気がしました。

また、先ほど大島委員からも方程式のこととかありましたけれども、私は図形のところに少し注目して「作図の仕方」。私も数学は比較的好きだったのですけれども、どうも図が入ってくると、頭が固いせいか、なかなかわからない。ただ、図形の作図というのを見ますと、定規とかコンパスを使ってどのようにつくっていくのかなというところで、その導入などが東京書籍の152ページなどには非常によく……。垂線の書き方とか、垂直二等分線などが非常に丁寧に書かれているのですけれども、その他の教科書では、学校図書が、163ページですけれども、作図のところは比較的わかりやすい説明があったように思います。そのほかの教科書で、数研出版も「定規とコンパスを使ってかくことを作図と言う」という導入で、垂直二等分線などがきれいに書かれてございます。

そういった中で、そのところに着目すると、東京書籍ですとか、学校図書、数研出版などは比較的わかりやすく書いてあるかなというふうに思いました。

「方程式」のところでは、その導入の仕方で、各教科書会社、工夫をされていますけれども、子どもたちにとって学びやすいという視点からいくと、東京書籍の内容がわかりやすいのかなと。あと、「等式の性質」などについても比較的わかりやすく書いてあるのは

東京書籍ではないかなというふうに思いました。

また、東京書籍の３年の教科書では、１年の用語のまとめがあって、いよいよ中学を卒業していくということになると、わかりやすくなっているかなと思います。

大日本図書も、教科書としては字が大きくて非常にわかりやすい教科書にはなっているのですが、時間数がこの改定によって、１年生も105時間から140時間、２年生は105時間が同じですが、３年が105時間が140時間ということで増えてはいますが、果たして大日本図書のように、300ページを超える教科書が使いこなせるかどうか。これは、内容が余りにも豊富過ぎて、授業をする側にとっては大変なのではないかなというふうにちょっと危惧した次第です。

ということで、全体的には、各委員がご指摘されましたように、東京書籍、続いて、大日本、啓林館、数研出版などが教科書としてはふさわしいのではないかなと思いました。

以上でございます。

ほかに発言はございますか。よろしいでしょうか。

（発言する者なし）

山田委員長

ありがとうございました。

委員の皆さんの意見をお伺いするとともに、教科書採択基準からすると、東京書籍が最適であると思いますので、数学につきましては東京書籍を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

山田委員長

ご異議ございませんので、数学は東京書籍を採択候補とすることといたします。

次に、理科についての協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、理科につきましては教育長からお願いいたします。

教育長

理科につきましては、改訂の趣旨が大きく変わったといいますか、趣旨の中では、エネルギー、粒子、生命、地球などの科学の基本的な見方や概念を柱として理科の内容を構成し、科学に関する基礎・基本的概念の一層の定着が図れるようにするというようなことがありましたり、それから、観察・実験を充実させ、原理や法則の理解を深めるための物づ

くり、継続的な観察や季節を変えての定点観測など、科学的な体験や自然体験の充実を図るということがございます。特に実験や観察の充実ということが眼目になるかと思います。また、時間数が1.3倍に増えているということでは、丁寧に扱える教科書というのが重要になってくるのではないかなというふうに思っているところです。

理科については、５社、東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、啓林館がありますが、学校図書と教育出版については、従来の第一分野、第二分野というような概念を踏襲している教科書でした。この二つの教科書については、どちらかというと、単元ごとの導入に当たっての素材や題材の取り上げ方が少ないように思いましたし、実験の仕方の説明なども教育出版は特に説明が小さくてわかりにくいのではないかなという印象を持ちました。

学校図書についても、実験の手順や注意点の示し方というのがわかりにくいような印象がありました。

また、啓林館については、割と厚くて重たいというようなことと、特徴的に「マイノート」という分冊があるということで、ちょっと特色がある教科書です。分かれていることのメリット、デメリットはあると思うのですけれども、私の印象では、本文の内容もかなり難しいというような印象があったり、「マイノート」というので分かれていて、一見、整理しやすいのではないかという印象もあるのですけれども、分かれていることによる使い勝手の悪さというのもあるのではないかというふうに思いました。

また、改訂の趣旨や教科の目標というのを踏まえているのは、東京書籍と大日本がバランスよくあるのではないかなというふうに思ったところです。この両者とも小学校からの接続をかなり意識していたり、導入が身近でわかりやすい、あるいは身近な素材や材料を使っているということで、思考も広がりやすいというようなことがあったり、日常生活との関連を重視しているということでわかりやすい教科書ではないかなというふうに思ったところです。

東京書籍については、少し大判だということはあるので、その使い勝手がどうかということもあります。

大日本図書については、学習指導要領を踏まえたということだけではなくて、安全指導の記述がわかりやすかったり、３年生でどの教科書も放射線について取り扱うのですけれども、選定調査委員会の委員長が説明をされたときに、特に東日本大震災を踏まえて原発事故で風評被害などがあるということでは、子どもたちに放射線などの知識を適切にわか

りやすく教えられる教科書がいいと思うというようなご発言もあったのです。それを踏まえますと、大日本図書が３年生のところで４ページ扱っていて丁寧に説明をしているということでは、大日本図書がすぐれているのではないかなという印象を持ちました。

以上です。

山田委員長

では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

今、教育長が最後に言われた地震とか津波とか原発とかというものですが、理科の教科書にこんなに載っていると驚いたぐらい載っているのですね。びっくりしました。それで、地震のことで言うと、そんなに多くはないのですが、大日本図書の253ページに割と詳しく、プレート等も書いてあって、ほかの教科書よりはちょっと詳しいかなと。それから、東書のほうは、日本地図があって、今までの地震の震源地とか、そういう地図はありました。それから、ほかもありますが、そんなたくさんはありません。

それから、私、津波というのが見当たらなかったのですが、だれか見つけた人はいるでしょうか。津波というのは意外となくて。理科の教科書なのでそうなのかもしれないのですけれども。

あと、エネルギーの問題。火力発電、水力発電も含めて原子力発電等、エネルギーの問題についてはかなりいろいろな教科書会社が詳しく書いているというのがわかりました。これも、前にちょっと申し上げましたけれども、日本の、あるいは世界の将来を考える意味で大事な問題を含んでいるなと思いますので、この前、調査委員長が言われた、子どもに考えさせる材料を与えるといいますか、そういう視点で教科書が使えればいいと思います。ですから、大日本の場合には発電の仕組みまで載っていましてすごいなという感じがしました。

それから、教育出版のも結構載っていまして、人体に与える何ミリシーベルトとか、ちょっと難しいかなと思うぐらいの図が92ページのところに出てくるのです。理解するのが大変かな、かなり高度かなと思いますけれども、こういうのも出ています。

それから、東京書籍も割と詳しく載っています。東京書籍は、科学の歴史とか、読み物風みたいなものがあるのですが、ちょっと難しい気もしないでもないのです。これだけ読めばわかるというわけにいかないでしょうけれども、かなり説明しないとわからないのかなという気がします。

ということで、全体的に言いますと、大日本図書、教育出版という順番でどうかなというふうに思っています。大日本図書、教育出版という順番で推薦したいなと思っています。

以上です。

山田委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

私も、基本的には、大日本図書か東京書籍のどちらかがよろしいかなと思います。別冊「マイノート」は、ついてきて、一見お得のような気もするのですが、それに答えもついているので、例えばこれを自習用にさせようと思っても答えを写されてしまいますし、じっくりやるには分量が少ないのでいらいらすると思うのです。ちょっと中途半端かなと。やはり、中学生になっていきなり難しいことをやって理科が嫌いになる、そういう子は結構多いので、最初は、植物とか身近なところから入ってくるのがいいのではないのかと思います。

これも子どもに教えていて、植物の導管と師管のところなのですが、通信の教材で教えていて図がわかりにくくて、「こっちが導管でこっちが師管だろう」と言って答えを見たら違っていたのですね。それを考えると、大日本も東京書籍もすごくわかりやすいのですが、大日本図書の42ページの大きな断面の模式図というのは非常にわかりやすいです。東京書籍もいいのですけれども、これだけで決めるわけではないのですが、非常に丁寧にいろいろなところが展開されていてよろしいかと思います。

あと、個人的に言うと、大日本も、東京書籍も、１年生の教科書に恐竜のティラノサウルスの写真がついているのですが、大日本のほうがちょっと大きいのがついていて、発展のところでも、恐竜の絶滅した原因というのを扱っているのです。結構恐竜好きの子はいて、こういうのは生徒の興味をすごく引くので、別に恐竜だけで選ぶわけではないのですが、両方ともいいのですけれども、私としては大日本図書を第一候補としたいと思います。

以上です。

山田委員長

続きまして、大島委員、お願いいたします。

大島委員

理科は、以前は、第一分野、第二分野という分け方をしていたのですけれども、今回からはそういう分野の分類というのはなくなって、単元というだけの分類になったというこ

となのです。ただ、例えば教育出版、学校図書、啓林館は、「分野」ということで目次なども一応分けて記載しています。大日本図書と東京書籍は、「分野」という概念は使っていないので単元だけになっているのですけれども、そういう扱いの違いによって教科書の記載する順序が違ってきているわけで、第一分野、第二分野というふうに分けている教育出版、東京書籍では、第一分野の物質の話が一番初めに出てきて、次に第二分野というふうに教科書の順序が並んでいる。啓林館は、一応「分野」としているのですけれども、新しい分け方のことをちょっと考慮して、第二分野のほうを先に持ってきている。したがって、植物についての単元が一番初めに出てきているのが大日本図書と東京書籍と啓林館というふうになっているわけです。４月に学校が始まるということから、４月に植物についての勉強をするというのがふさわしいと一般的に先生方も考えられているようで、植物を初めにやるというところが多いようなのですけれども、そういう実態に合っているのが大日本図書、東京書籍、啓林館ということになるわけです。並べ方だけの問題ですから、別に、後のほうに出てきているのを先に４月にやっても全然構わないのですけれども、ちょっと扱いがしにくいかなという印象があります。

学校図書については、私がいいと思ったところは、四つ単元があるわけですけれども、それぞれ見開き１ページで、その単元の中にどういう章があってどんなことを勉強するのかというのが概括的にわかるようになっていまして、これは大変いい工夫だなというふうには思いました。

ただ、ほかの点でこれからお話しするのですけれども、私はまず気象のところの説明がどんなふうに書いてあるかなというところに着目して各社を見比べてみたのです。啓林館については、気象、それから前線というものが系統立てて理解できない。気圧とか風とか大気とか、いろいろ細かいことが並べられているという感じで、気象というのはどういうふうに考えたらいいのかというのは、系統立てて説明されていないという印象がありまして、ちょっと学びにくいなと。

学校図書も、大気中の水から雲、天気の変化、観測、前線、日本の天気、これもいろいろな説明はあるのですけれども、ばらばらな感じで、気象というものを系統立てて理解しづらかったということがあります。教育出版は、空気中の水から雲、気圧があって、それで前線というこの説明の順序はいいのですけれども、前線の最後のほうの説明のところで初めて雲の写真が出てくるので、やはりもっと初めに雲の説明のところで雲の写真も出てこないと理解しづらいということで、そういう構成が余りよくないと思いました。

東京書籍は、気象観測、気圧と風、前線、気団、大気と天気ということと全く別の章で雲のでき方というのを説明してあるので、ちょっとつながりがなくて、気象全体についてはちょっとわかりにくかったかなと。

そういう点で大日本図書は、湿度から雲、水の循環というようなことが図でよくわかりまして、そこから前線、気象ということに話がいっていて、全体として、気象というものが系統立てて理解しやすかったというふうに感じました。そういう気象についての説明という点で大日本図書がわかりやすかったなという印象です。

もう一つは、電流と電圧のところを見てみたのです。これは２年生で扱うところなのですけれども、教育出版については80ページに回路図が出てきまして、まず、静電気の説明から電気のほうの説明に入っているのです。小学校で静電気というものをやっていないので、いきなり静電気から入るというところがわかりにくいのではないかという印象を持ちました。それから、東京書籍は、電流、電圧の説明は大変よくやってありますし、特に電圧というものの理解の助けとして、滝を用いた図で説明しているのがすごくいいと思いました。

大日本図書のほうも、電圧の説明でやはり滝を使っているのですけれども、中に電池の絵を入れていまして、さらにこれがわかりやすくなっているという点で、大日本図書は電圧についての説明のところもわかりやすいのではないかということ。

それから、運動とエネルギーのことです。東京書籍のほうは、運動というのを勉強してから、力の分解とか向きというのを扱っているのですけれども、この順序だと理解が難しいのではないか。大日本図書のほうは、逆に、力の分解とか向きをやってから運動、エネルギーのほうにいっているので、このほうがエネルギーというものについての理解がしやすいのではないか、そういう構成上の問題。それから、図とか実験も出ていまして、説明もわかりやすいというようなところも使いやすいのではないかということです。

それと、大日本図書がいいかなと思うのは、２年生の176ページからのところに電流などの説明があるのですけれども、項目一つ一つに図があって大変きめ細かい説明がある。実験の図も、左右のページに並べてあってわかりやすいというふうな印象を持ちました。総体としては大日本図書が勉強しやすいのではないかと思いますので、推薦したいと思います。

以上です。

山田委員長

では、最後、私のほうからです。

大島委員からご指摘のように、以前、理科は第一分野、エネルギーや粒子、第二分野、生命や地球ということになっていたのですけれども、今回からは、多くの教科書は学年単位に３冊構成になって、全部で５社から教科書が出版されています。時数も1.3倍というふうにかなり増えてきましたので、各教科書は構成としては厚くなっていることは事実ではないかと思います。そんな中で、理数科というか、理科離れということを考えると、特に実験などのことが丁寧に書かれているかどうか、その辺の視点も大切なのではないかなと思います。単純に教科書のページ数からいきますと、観察・実験の取り扱いが多いのが大日本図書、続いて東京書籍、次いで教育出版という順番の構成になっているかと思います。

高木委員からお話があった啓林館の「マイノート」については、どのように評価するか非常に難しい判断ではないかなと思います。

あと、実験のところで、これから若い先生も増えてくることも考慮しますと、安全ということに対してどのくらい視点を持っているかというところで見比べてみますと、教育出版、啓林館など、安全に対しての配慮が少し少ないのかなと。学校図書は、実験操作そのものが独特な器具を使ったりするので、それに対して、若い教員の先生方は扱うのにどうされるのかなという心配がちょっとございます。その点からいきますと、東京書籍、大日本は安全というものの視点をかなり教科書に組み入れてわかりやすく解説されているのが特徴的ではないかなと思います。

あと、今度の震災がありまして、放射線とか、いわゆる原子の問題とか出てくると思います。物質の成り立ちのところを見てみますと、記載としてわかりやすいのは東京書籍、大日本図書。２年生で出てくるのです。特に大日本図書では、原子の種類をあらわす記号の例として、名前の由来なども出てくるのですね。私は、原子というのは名前の由来まで考えて覚えたわけではないのですけれども、なかなかわかりやすい表示が出ているかなというふうに思います。原子と出会って、その物質の成り立ちをどう学ばせていくか。学校図書などの導入は少し難しくて、子どもたちは取っつきにくいのではないかと思います。

あと、何人かの先生からお話がありましたように、今回の震災のことも受けて、放射線のことの取り扱いについては、教育長がおっしゃっていましたように、調査検討委員会のほうからの報告もございますが、丁寧に取り扱っているのは、大日本図書272ページ以降にありまして、レントゲンというものの取り扱いですとか、ベクレルという人が放射線を提唱したと。それから、放射線には、エックス線、α、β、γ線があるとか、シーベルトな

どもこの教科書には出てきていますので、比較的わかりやすい記載がなされております。

飛鳥馬委員ご指摘のように、地震の起こる仕組みについては、各教科書触れておりますし、わかりやすい表示になっていますけれども、ちなみに「津波」という表示は東京書籍にございました。地震ということについても、プレートのこと、そのプレートもどのようなプレートの境界が日本にきているのかとか、そのような記載が各教科書に一応記載されています。

エネルギー問題について詳しく述べているのは教育出版。電気エネルギーを得る方法という形で、火力、水力、原子力、新しいエネルギーとして、風力、地熱、バイオマスなども取り上げて詳しく説明されていますけれども、そのほか、学校図書もエネルギーのこと、大日本も再生可能エネルギーとしてバイオマスなどを取り上げていますし、東京書籍も水力、火力、原子力という形での取り上げ方がありました。

全体を通して見ていきますと、大日本図書、東京書籍などが比較的説明が豊富で、子どもたちにとって学びやすい教科書ではないかというふうに思いました。

私からは以上であります。

ほかにご発言はございますか。よろしいですか。

（発言する者なし）

山田委員長

ありがとうございました。

委員の皆さんの意見をお伺いするとともに、教科書採択基準からすると、大日本図書が最適であると思いますので、理科につきましては大日本図書を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

山田委員長

ご異議ございませんので、理科は大日本図書を採択候補とすることといたします。

ちょっと休憩します。

午前１１時０４分休憩

午前１１時０５分再開

山田委員長

では、再開いたします。

次に、音楽について協議を進めます。

初めに、各委員からご意見をお伺いしたいと思います。

音楽一般でございますけれども、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

音楽は教育出版と教育芸術社ということですね。最初に教育芸術社のほうですが、目次を見るとわかりやすいような気がするのです。何かまとまっているというか、「学習の窓」という表示がありまして、学習する順番といいますか、目次が非常にわかりやすくなっています。

それから、ちょっと見た感じで、私は楽譜も見やすいのかなという気もします。それから、音楽用語と言いますか、音楽の言葉の説明が丁寧にされているように思います。あと、合唱コンクールなどで子どもたちは随分指揮をやるわけですけれども、その指揮のやり方が１年生のところから載っているとか。あと、日本の音楽、外国の音楽、西洋音楽とかいろいろあると思うのですけれども、日本の音楽といっても、かなり西洋化されて外国の影響をたくさん受けているわけですけれども、それは外国の音楽といろいろな文化を含めて、社会生活とか日本の国の歩みみたいなものとの関連というのも教育芸術社は出ているのだろうと思うのですね。

それに比べて教育出版のほうは、目次はちょっとわかりにくいような気がするのです。ただ、１曲ごとにポイントが書いてあって、ただ楽譜は教育芸術社に比べればちょっと見にくいのかな。

あと、教育出版のほうは、歌うときの姿勢といいますか、呼吸といいますか、そういうのがよく載っているという気がします。

あと、全体的に音楽そのものが幅広く、いろいろな分野から学べるようになっている工夫があるかなと思います。

あと、音楽で表現だと思うのですけれども、言語活動を意識しているというのでしょうか、鑑賞、聞いた後、感想を書くみたいなことですね。そういう書くことが少し多いのかなと。音楽なのですけれども、書く表現が多いのかなという気もします。

ということで、どちらも遜色ないような気がしますが、全体的に見ると、教育芸術社がよろしいかなと思っています。

以上です。

山田委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

音楽２社で、両方ともいい教科書だなと思うのですが、どちらかを選ばなければいけませんので。

表紙の裏のところの最初の写真を見ますと、教育芸術社のほうは、例えば１年生ですと、合唱でみんなでつくり上げる音楽ですとか、２年生のほうでも、子どもたちや日本、地域の人ですか、歌うようなところが入っているのに比べて、教育出版社のほうは、最初にフジコ・ヘミングさんとか、市川団十郎さんとか、ジョン・レノンさんとか。もちろん、教育芸術社のほうも、２枚目からは伊藤多喜雄さんとか有名な方が入っているのですが、最初に、みんなで歌うんだよというところが入っているのは、私のように音楽が余り得意でない子どもには親しみやすいのかなと思います。

両方の１年生と２・３年の上・下の目次のところを見ていきますと、私のイメージなのですが、教育出版のほうがやや難しい曲があるかなと。例えば２年生の上のほうで、歌のアルバムのほうなのですが、「アメージング・グレース」とか「カントリーロード」とかが入っていて、英語ですね。ここら辺は、もちろん全部が全部扱うわけではないと思うのですが、確かに「アメージング・グレース」を合唱で歌えればすごくいいのですけれども、ちょっと難しいかなというイメージがあります。

それに比べて、教育芸術社のほうは比較的取っつきやすいというか、取り組みやすい曲。あと、曲のバランスも、伝統的な曲からちょっと新しい曲も入っていて、非常に幅広く対応できるような気がしますので、どちらかに絞れと言われれば、私は教育芸術社のほうを推したいと思います。

以上でございます。

山田委員長

では、大島委員、お願いいたします。

大島委員

私も、どちらの教科書も全く問題なくいい教科書だと思いますので、どちらかを選べというのは非常に難しいところで、困ったことなのですが。

初めの方の写真とか取り上げているトピックとか、好みとかはいろいろあるにしても、どちらも大変すばらしいと思います。個人的な好みからすると、教育芸術社の２枚目に男の人の顔がいきなり大写しで出ているというのは、私、本当はちょっと抵抗がありまして、顔の写真はもう少し小さくしてほしいというのはあるのです。教育芸術社はそこの難点は

あるのですが、それは本質的なことではないので置いておきます。取り上げている曲も、高木委員がおっしゃるように、ちょっと難しいとかいろいろあると思うのですけれども、そんなにどちらかがすごく不適切なものとかいうことでもないと思うのです。

あと、特徴として目につくのは、芸術社のほうは、割とオペラを大きく扱っていて、教育出版社のほうはオペラはほんの少ししか扱っていない。逆に、教育出版社はポピュラー音楽のほうを大きく扱っているのに対して、芸術社のほうはポピュラーが少ししかない。そういう意味の大きな特徴はあるかなと思うのです。私はどちらも好きなので、それで甲乙はつけられないのですが。

芸術社のほうの特色としては、目次のところに各曲の特徴とか目標みたいなものが……。「まとまりを感じ取って表現しよう」とか、曲ごとに特徴が書いてあるということと、記号がありまして、右側のほうにある「学習の窓口」というところに示してあるリズムとか旋律とか、特にそこで重点的に学ぶような項目についてマークがついているとか、そういう教育上の配慮がされているというところは芸術社のいいところかなと。

あと、ちょっとあら探し的なようなことで恐縮なのですが、創作活動の点については、１年のところで、芸術社のほうでは６ページから７ページにかけてまず音符があって、それを使ってリズムをつくろうというようなことで、小学校の復習ということを意識したつくりになっているのに対して、教育出版社のほうは47ページでいきなりリズムをつくろうというのが始まっているので、小学校の復習というようなことを意識した芸術社のほうが、この点の指導についてはいいかなと思います。

あと、シューベルトの「魔王」という曲を鑑賞しようというところで、「魔王」というのは、お父さんと子どもと魔王というのが出てきて、そのやりとりみたいなところを音楽であらわしているということで、父、子、魔王、それぞれ非常に音の特徴がある。そのあらわしている特徴を聞き取りましょう、鑑賞しましょうということ。芸術社のほうでは、メロディが出ているのですけれども、それが何をあらわすものか、父、子、魔王というのは全く知らせないで出ている。これは想像しましょうということになっているのです。教育出版社のほうは、その楽譜のところにそれぞれ父、子とかはっきり書いてしまっている。音の特徴から、これはだれをあらわすのかというのを聞き取るというところからすると、書いていないほうがいいのかなというようなところで、細かいところでちょっと恐縮なのですけれども、そんなようなところ。

総合的に見ますと、どちらでもいいのですけれども、教育芸術社のほうが若干指導上の

工夫があるかなということです。僅差というところですか。一応教育芸術社のほうがいいかなと思っております。

以上です。

山田委員長

それでは、教育長、お願いいたします。

教育長

音楽についても、学習指導要領の改訂の趣旨のところで、音楽文化について理解を図り、郷土の音楽や我が国の伝統音楽を重視するというようなことですとか、言語力の育成や活用の重視を図るというようなことも改訂の趣旨にありました。こうしたことを踏まえて、今、お３人の委員の方から、教育出版と教育芸術社、どちらも甲乙つけがたいというようなことで、比較的教育芸術社のほうがいいのではないかというようなご意見がありましたけれども、私もそういうふうな印象を持っています。

飛鳥馬委員が言われたように、目次についても、教育芸術社のほうが見やすく親しみやすい、学習する内容がわかりやすいというような印象です。また、音楽文化についての理解を深めるという学習指導要領の教科の目標からしてみると、例えば同じ材料、題材を二つの教科書は両方扱っているのですけれども、ビバルディの「四季」の中から「春」について、教育芸術社が34ページから37ページ、教育出版が32ページから35ページというふうに見開きですと２ページずつ４ページ扱って、同じ分量を扱っているのですけれども、教育出版のほうは32ページに冒頭の音符があって、次のページに音符が全部載っているという構成で４ページを使っていて、曲の解説については33ページの１ページだけなのですね。一方、教育芸術社のほうは、音符はそれほどないので、これは鑑賞してもらえばいいという趣旨だと思うのですね。演奏の写真も教育芸術社のほうが大きかったりしていますし、ビバルディについての紹介も大きく、あと、イタリアの気候から「四季」についての解説が載っているということ、あるいは、ビバルディが聞いたバイオリンの響きと現代ではこういうふうに違うのだよというようなことで言うと、音楽文化についての理解を深めるということでは、教育芸術社のほうがより丁寧なのではないかなということを感じました。

それから、大島委員がおっしゃった「魔王」についても、大島委員が指摘された趣旨だけではなくて、教育出版の37ページにはシューベルトの曲と、同じように、ドイツの作曲家のヨハン・ライヒャルトの「魔王」と比較してどうかみたいなことを書かせる記述があるのですけれども、こういうことだと、経験不足の教員にはなかなか解説がしにくいので

はないかというようなことが感じ取れています。

それから、「魔王」のところでもう一つ言わせていただくと、教育出版の36ページに歌詞が載っているのですけれども、次のページの「魔王」の歌詞は違うのですね。これは訳詞した詩人の違いなのですけれども、昔の訳詞と今の訳詞はこう違うんだよというようなことなのです。この辺も、子どもたちや若手の教員にはなかなかすっと入っていきにくいのではないかなと。それよりは、教育芸術社が41ページに載せていますように、ゲーテの紹介があったりということでは、文化の説明についてより丁寧なのは教育芸術社ではないかなというふうに思いました。

以上です。

山田委員長

では、最後、私のほうからです。

音楽。教育出版と教育芸術社の２社から出版されています。今回の指導要領の変化の中では、特に我が国の伝統文化ということで、いわゆる和楽器の指導ということを新たに多く取り上げるようになってきているかと思います。そんな中で二つの教科書を見比べてみますと、どちらも箏のところでは、箏曲「六段の調」というのを取り上げていますが、箏というのはどんな楽器なのかということの写真からいくと、教育芸術のほうがイメージとしてはわかりやすい。また、その次には、尺八の曲「巣鶴鈴慕」などを取り上げていますけれども、尺八を見る子どもたちも初めて見るでしょうから、こんな楽器であって、音はどうやって出すのだろうというようなことが書いてあるということもあって、比較的わかりやすくなっているのかなというふうに思います。

中野区では、音楽は音楽専科がほとんどの授業を担当しているわけで、何人かの委員からお話がありましたように、目次の中で、アイコンを使って、ここはリズムですよとか、ここは音色をとかいうような指示が出ておりまして、音楽専科の先生方にはこの辺はより能力が発揮できるようなレイアウトになっているように思います。

また、中野区では合唱コンクールをやっていますけれども、子どもたちが合唱するだけでなく指揮をする場合もあるかと思います。教育芸術社の１年生の教科書の50ページですか、「指揮をしてみよう」ということで、指揮をするときのポイントだとか、そのようなことが両面にわたって詳しく書いてありますので、そういった面での指導には役立つのではないかと思います。

教育出版も比較的わかりやすく取り上げられて、レイアウトが工夫されているわけです

けれども、全体の構成からいきますと、多くの委員がご指摘のとおり、教育芸術社のほうが使いやすい教科書ではないかなというふうに思いました。

私からは以上でございます。

ほかにご発言はございますか。

（発言する者なし）

山田委員長

ありがとうございました。

委員の皆さんの意見をお伺いするとともに、教科書採択基準からすると、教育芸術社が最適であると思いますので、音楽につきましては教育芸術社を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

山田委員長

ご異議ございませんので、音楽は教育芸術社を採択候補とすることといたします。

次に、器楽についての協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、高木委員からお願いいたします。

高木委員

音楽（器楽）につきましても、教育出版と教育芸術社の２社からの選択でございます。

これははっきりと違いがありまして、教育出版の場合は、開くとまず和太鼓で、熱いメッセージがありまして、箏、三味線、篠笛、尺八。目次の後に「箏の響きを味わおう」ということで最初に箏が扱われてきます。一方、教育芸術のほうは、見開きのところでは、箏、ギター、リコーダー、尺八等、和洋バランスよく紹介されていて、次に、さまざまな楽器の音ということで、ここはクラシック中心。いろいろな笛の種類。で、目次を挟んで、最初にアルトリコーダーという展開でございます。教える順番は変えられるとは言っても、小学校でリコーダーをやっている子どもたちにとっては、最初はリコーダーのほうが入りやすいのかなと。箏も、中野区としては伝統的な楽器ということで重視はしているところなのですが、１人１個はいきわたりませんので、そうすると、やはりリコーダーからスタートのほうが教科書としてはいいのではないかと思います。

また、戻って目次のほうを見ていきますと、若干、教育出版のほうが難易度が高い曲が多いかなという気がします。もちろん、出ている曲を全部現場でやるわけではないと思い

ますが。こだわるわけではないのですが、リコーダーのところで、教育出版は最初にいきなり「アメージング・グレース」が出ていますが、これは音が高いですよね。もちろん教育出版もいい教科書だと思うのですが、どちらかということであれば、教育芸術社のほうを第一候補としたいと私は考えます。

以上でございます。

山田委員長

では、大島委員、お願いいたします。

大島委員

私も、今高木委員がおっしゃられたようなことで、構成というか順序として、教育芸術社のほうがリコーダーから始まっている。教育出版社のほうは箏、和楽器から始まっている。小学校ではみんなリコーダーを習ってきていますし、箏というのはほとんどやっていない。中学校でも、まずはリコーダーの学習から入ると思いますので、そのリコーダーを先に取り上げているほうが教科書として非常に使いやすいのではないかというふうに思います。

それから、箏のことについてなのですけれども、教育芸術社では27ページからですか、縦型の楽譜というのを示しています。これは、見たことのないといいますか、西洋の楽譜とは全く違う楽譜で、私も正直初めて見たのですけれども、日本の伝統的な楽器ではこういうものを使うのだと、子どもたちにとって新しい知識として大変有用なのではないかと思います。こういう工夫がされているというところは大変いいのではないかと思います。

曲目なども、どちらが不適切なものがあるとか、そんなことはないと思うのですけれども、全体的な構成とか、あと、教育芸術社では学期ごとに目次に色分けがしてあって大変イメージしやすいというような細かな工夫の点などで、教育芸術社のほうが使いやすいという点からそちらを推したいと思います。

以上です。

山田委員長

次に、教育長、お願いいたします。

教育長

お二人の委員からご意見がありましたように、器楽では、二つの教科書の中でリコーダーから始まっているということと、和楽器から始まっているという違いがあるのですけれども、選定調査委員会の意見の中でも、リコーダーからの導入が親しみやすいという意見

がありましたし、私もそのように考えていますので、教育芸術社のほうが親しみやすいのではないかなというふうに思っています。また、教育出版のほうは、いろいろな種類の和楽器を数多く取り扱って演奏方法などを紹介しているのですけれども、和楽器というのは、今の教員の中ではそれほど親しみある楽器ではないし、演奏方法について全員が周知しているわけではないので、そういう意味で言うと、教えやすさから言うと、教育芸術社のほうがシンプルで教えやすいのではないかなというふうに思います。

私も、大島委員がお話になったように、日本の楽譜というのを紹介しているということでは、音楽文化の紹介ということで、教育芸術社のほうがより丁寧な記載があるのではないかというふうに思っています。また、全体、合奏ということを考えてみますと、いろいろなアンサンブルが組みやすい曲というのは、教育芸術社のほうが親しみやすい曲があって、アンサンブルの仕方についてもよりわかりやすいのは教育芸術社ではないかなということで推したいと思います。

以上です。

山田委員長

次に、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

皆さんおっしゃっているように、私も、教育芸術社がいいと思います。リコーダーから入っていて親しみやすい。それから、曲も比較的親しみやすい曲が多いのかなと思います。

それから、和楽器の次に箏が出てくるわけですけれども、箏も、写真を豊富にして、ページ数もたくさん使って非常に丁寧に説明しているので、特に中野は、箏は学校でやったり、結構扱うので。教育出版のように三味線も箏も和太鼓もみたいに同列にいくよりも、箏を集中的に扱っているような気がするので、そのほうがいいかなと思います。教育芸術社でよいと思います。

以上です。

山田委員長

では、最後に私からであります。

音楽（器楽）も、教育出版と教育芸術社の２社から出版されているわけですけれども、各委員からお話がありましたように、教育出版は今回の改訂を意識して、和楽器を中心に前に押し出しているというイメージがあります。確かに、最初に日本の和の文化について触れさせるという意図はあるのですけれども、高木委員などがお話しされたように、小学

校からの連結でいきますと、また選定委員会からの報告もありましたように、リコーダーから入ったほうが子どもたちにとっては学びやすいというような話が確かではないかと思います。

また、音楽に限らず、器楽というものの教科書を通じて、社会的なものとの兼ね合いということで考えますと、例えば教育芸術社の裏表紙のところには、日本の伝統音楽の楽器編成というのが載っているのですね。皆さんも、能だとか狂言だとか歌舞伎に行ったときに、どんな和楽器が使われているのか、なかなかわからないところですけれども、こんな楽器がこういった芸術の分野で実際に使われているのだということで、子どもたちがこれから社会的な文化を学ぶ上で、こういった些細なことですけれども、資料としてはすばらしいのではないかと。

また、頭のほうには、いろいろな長さの笛ということで、尺八とリコーダーと篠笛などが出ているのですけれども、こんなに大きさが違うんだとか、こういうふうに日本の和楽器はなっているのだということ。また、さまざまな楽器の音ということで、ビートルズが出てきて、いろいろな楽器の音が出てくるのですけれども、こういった発展的なものも出ているということで、そういったところではすばらしいレイアウトで構成されているかなと思います。

教育出版もいろいろな面で工夫がされておりますし、冒頭にお話ししましたように、日本の伝統ということでそれを随分意識したすばらしい教科書であるかと思いますけれども、子どもたちが学びやすいという視点からは、教育芸術社のほうが少したけているのかなというふうに思いました。

私からは以上であります。

ほかに発言はございますか。

高木委員

箏の縦の楽譜なのですが、私も気がつかなかったのですが、教育出版社の90ページに「さくらさくら」で１ページ載っていましたね。ただ、先生は知っているのでしょうけれども、我々も今気がつくということは、やはりちょっとわかりにくいので。載っているのは載っているということです。

以上です。

山田委員長

ほかにご発言はございませんか。

（発言する者なし）

山田委員長

ありがとうございました。

委員の皆さんの意見をお伺いするとともに、教科書採択基準からいたしますと、教育芸術社が最適であると思いますので、器楽につきましては教育芸術社を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

山田委員長

ご異議ございませんので、器楽は教育芸術社を採択候補とすることといたします。

続いて、美術についての協議を進めます。

初めに、各委員それぞれからご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、大島委員からお願いいたします。

大島委員

美術ですけれども、３社から出ておりまして、日本文教出版と光村と開隆堂です。

美術は、私、個人的なことを言うと、大変苦手科目だったのです。そういう苦手な私でも、やってみようかな、やってみたいなという気にさせるかどうかという観点から教科書を拝見しました。

まず、３社どれもそれぞれ美術として教えたい、あるいは経験させたいいろいろな分野のことは全部扱っていますので、どれも全く悪いということはないと思います。ただその中でも、私が見た印象では、文教出版のものは、教科書として通り一遍という感じがいたしました。１年生の初めのところで、いきなり手で粘土をこねたり、あるいは絵の具を使って何か作業をやっているところの写真があるわけですけれども、何か作業をやらされるというような印象があります。もうちょっと敷居を低くして意欲を引き出すというような感じがなかったという点。それから、全体に写真が小さくて、たくさん詰め込んでいるという印象がありました。あと、技法の説明も小さくてわかりづらかったですね。45ページから技法の説明があるのですけれども、小さくて余り親しみを感じないという感じでした。

あと、開隆堂は、初めに、美術の学習で大切にしたい四つの手がかりというのを書いてありまして、押しつけがましさはないのですけれども、何か学習という点を初めから出しているのが、さっき言ったような導入のしやすさという点からしてちょっとどうかなと。もちろん、開隆堂も大変きれいですし、教科書としてもいいとは思いますが、比べてみま

すと、印象的な話になってしまうのですけれども、光村のものが初めに美術とは何だろうというところから始まって、ゆったりしたイメージです。折り込みを使って紙面を大きくしているせいもあると思うのですけれども、ゆったり誘われているような感じがしました。

その次に見て描く楽しみとか、何となく次から次にテーマがちょっとおもしろいなと興味を引かれるようなタイトルにもなっているし、興味を引かれるような内容になっているような印象があります。

あと、「作者の言葉」というコーナーがところどころにありまして、その作品をつくった人の言葉が出ているので、そのときの心情などが書いてありますと、その作品と自分を結びつけてくれてとても親しみを感じるという点がいいと思います。２年・３年のほうの教科書についても、初めの「美しい」というコーナーが単純に美術の美しいものに感動するという、何か作業をしなさいと押しつけるのではなくて、美しいねという感動を誘うような構成が大変いいのではないかと。何かを感じてほしいという本のメッセージが伝わってきて、つまり、何か書きなさいとか、つくりなさいということではなく、そういう感じるということをまず大事にしているみたいな、そういう姿勢が、さっき言った私のように余り得意でない者にも美術への興味を誘うという感じがしました。

あとは、１年生の「風神雷神」の見開きの大きい写真がすばらしいなと。これは、生徒が何かやるというというよりも、鑑賞用としてすばらしい。単にそういうことだと言ってしまえばそうなのかもしれないのですけれども、今まで何となくは見たことがありますが、こんなに迫力ある大きな絵で見たのは私も初めてで、これを見るだけでも美術の教科書の価値があるような気がするほどすばらしい写真だと思います。

そんなことで、どれでも、悪いということは全くないのですけれども、個人的に美術は苦手で、余りやる気がない私でも、やってみようかなという気にさせられたという意味で、光村のものが親しみやすくてよかったなというふうに感じました。

以上です。

山田委員長

では、教育長、お願いいたします。

教育長

美術につきましても、改訂の趣旨のところで、美術文化に関心を持ち、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむですとか、鑑賞の指導を重視する、我が国の美術についての学習を重視するというようなところを踏まえて教科書を見ていきました。

今、大島委員がおっしゃったように３社教科書があるのですけれども、日本文教出版のものについては、写真や絵の扱いが多少印象が薄いかなというようなイメージを持ちました。美術の教科書というのは、美術の授業を見にいきますと、大抵子どもたちは作業をしているので、どこまで教科書を使うのかなということはあるのですけれども、例えば鑑賞ですとか、日本の我が国の美術についての学習、あるいは美術文化をはぐくんでいくというところに寄与するようなものであればいいのかなというようなことで、そういうところも気にしながら教科書を見ていきました。

そうしますと、１年生で、どこの教科書も「美術館へ行ってみよう」というページがあるのです。日本文教出版の32ページのところでは、「美術館に行ってみよう」というのがあるのですけれども、写真や絵が余り細かくて、美術館全体のイメージが持ちにくいのではないかなというふうに思いました。そのほか、光村の54ページと開隆堂の42ページにもあるのですけれども、やはり美術館らしさがあらわれていたり、光村のものについては、「話し合ってみよう」というようなページがあって、そういうところでは、鑑賞や、自分たちが考えをまとめていくというような作業もできるのではないかなということを思いました。

そうした結果、光村と開隆堂のどちらを選ぶかということになるのですけれども、先ほど言いました我が国の美術文化の継承と創造というような視点から言うと、大島委員もおっしゃっていましたように、「風神雷神」の写真が非常にインパクトがありましたし、屏風との組み合わせ、それから、その前に見開きの20ページのところでは、アーサー・ビナードという人の詩もあって、美術文化というところの鑑賞の仕方がうまく理解できるのではないかなというふうにも思いました。

そのほかに、光村については、阿修羅像ですとか鳥獣戯画の写真などがとても大きく取り上げられていていいなという印象を持ちました。

それ以外にも、光村では、２年生、３年生で２分冊のメリットを生かして、多くの作品を取り上げているだけでなくて、ゲルニカですとか、あと、自画像を紹介するというようなものでは、それぞれの学年で折り込みの工夫をよくされているなと思いました。

それから、やはり光村のところですけれども、アンドリュー・ワイエスとかシャガールなども冒頭の折り込みのところで扱っているのと、詩を組み合わせているというのがすごく効果的ではないかなと思って、美術については生涯にわたって美術鑑賞を私たちがしていくという心の豊かさにもつながるので、そうした心の豊かさになるような教科書という

意味でも光村図書を推薦したいと思います。

以上です。

山田委員長

では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私も光村と開隆堂を中心にということでお話ししたいと思います。教科書で言うと、光村が３冊ですか、それから、開隆堂が２冊ということです。美術の教科書なので、どっちでも扱いは同じかなと思うのです。多少厚くても重くてもいいのかなと思ったりしますけれども。

やはりこの折り込みのページのところが目を引くなと思うのです。よく見ると、見開きのこんな大きな折り込みにしなくてもいいような、４ページにしてもいいようなところまでちょっと無理してやっているところもありますので、大きい「風神雷神」みたいなものとか、鳥獣戯画とか、年表とか、そういうのはつながっていたほうが見やすいということがあるのですけれども、そうでない部分もありますので、これもどっちつかずかなという気もします。

私が光村がいいなと思ったのは、その自画像のところ。絵をかくだけではなくて、自分を見直すとか、自分への手紙を書くみたいな、絵だけでなくて、文字でもちゃんとあらわしてみるみたいなところです。

それから、開隆堂のほうで、日本の伝統文化のところで入れているのだと思うのですが、水墨画みたいなもの、墨絵みたいなものとか、日本の染物の染料の話とか、そういうのがちょこちょこ出てくるのです。そういうのは実際にどのくらい扱えるかわかりませんが、そういう伝統的なものも出てきます。

あと、使い勝手で言うと、開隆堂のほうは、見開きで１時間テーマみたいになったりするところもあり、４ページになっているところもあるみたいですけれども、そんなふうにまとめているのかなと思います。光村のほうは見開きだと思うのですけれども、そういうことで、これも甲乙つけがたいなと思います。私としてもどちらでもよろしいのではないかと思います。

山田委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

まず、１年生の教科書の表紙を見たときに、開隆堂はいつもぐぐっと迫るものがあるのですが、日本文教出版は国語の教科書もこういうようなものがあるかなと。美術の教科書なので、子どもにぐぐっと迫る表紙のものがいいなと個人的には思っております。

あと、私は美術に関しては、２・３年生で35時間しか時間数がありませんので、逆に、開隆堂のように、２・３年で１冊でいいのではないのかと。と申しますのは、学校外ですとか、教育委員会で視察をしたときに美術の時間に行きますけれども、めぐり合わせが悪いのか、教科書を使っているところを見たことは残念ながら一度もないのです。やはり中心は生徒の創作活動なので、そういう点で言うと、開隆堂と光村と両方いい教科書だと思うのですが、生徒の作品が一番多くて親しみが持てる開隆堂がいいかなと私は思っています。例えば開隆堂のところで言うと、２・３年の73ページのところに仏像の紹介があるのですが、伐折羅大将像がつくられたときはこんな色だったよみたいなものがあるのですね。我々が仏像を見ると、あっ、枯れていていいなと思うのですが、実際につくったときはそうではないのだというのは意外とわからないと思います。

また、最後のほう、86～88の年表ですね。年表は３社とも載っているのですが、日本、アジア、西洋ということで、国にこだわらずバランスよく年表が出ているのは開隆堂ではないかなと思います。一方で、光村も２・３年の上で言いますと、例えば私がここでいいなと思ったのは、35ページの和菓子ですね。私も先日和菓子屋さんで若葉蔭と同じものを見ましたが、こういう透明感があるのは割と最近なのです。それでもやはり戦前のものだったりするので、国際的に言うと、こういうのはまれなので、こういう日本の文化を実感させるというのは､多分実際につくりはしないのでしょうけれども、いいなと思いました。

あと、38、39ページで日比野克彦さんがアーティストで紹介されていて、私の感覚だと、若い人の紹介というイメージだったのですが、実はもう重鎮なのですよね。こういった形で、今、国際的に活躍しているような人の紹介というのは、美術が好きな子どもたちにとってはすごく実感がわいて、やってみたいなという気になるのかなと思ったところでございます。私としては、どちらかというと開隆堂のほうを推しますが、光村でもいいかなと思いました。

以上です。

山田委員長

最後に、私からです。

高木委員もご指摘のとおり、美術は１年生では45時間、２・３年生では35時間という時

間であります。特に今回の改訂で、日本の伝統文化ということですから、我が国の美術について学習をするということに新たに少し重きが置かれているようになっているかと思います。日本の伝統文化、歴史、美術文化を継承して後世につなげる視点を持つというようなことがポイントではないかと思います。

日本の美術作品の取り扱いが一番多いのは光村図書の159点、次いで開隆堂の131点です。一方では、生徒の作品が一番多いのは開隆堂が342点ということであります。どの教科書も一流の作品を多く掲載していますけれども、光村図書は一流の作品が比較的多いように思います。日本文教出版は、写真が若干小さくて余白が多いのかなというイメージがありまして、配色も少し単調かなということで、美術の教科書としてはどうなのかという疑問を持ちました。この３社とも美術史については年表をかなり充実させてつくっていまして、高木委員がお話のとおり、世界を視野に入れたような年表も掲載されているということがあるかと思います。

そんな中で、子どもたちが美術の作品をつくる上で安全というものを視点に見たのですけれども、光村の１年の「彫刻刀で彫る」などというところでは、どんなところに注意しなさいというような視点が書いてありました。一方で、開隆堂も道具箱の中で、カッターナイフや小刀について安全というものについての視点がありましたし、電気糸のこぎりなどについての記載もございました。そういった意味で、安全への配慮をしている教科書としては、開隆堂、光村ともきちんと配慮がなされているかなというふうに思います。

生活の中でという視点でとらえますと、例えば光村図書の美術の２・３年の下巻には、情報を整理して伝えるというようなところで、都市にいろいろ掲載されているデザインについての掲載があって、比較的身近に感じられるレイアウトになっていたように思います。

日本の美術作品の取り上げ方、各委員がお話をされているように、見開きで大きくどんと出ている光村ということもありますけれども、この辺はいろいろ意見の分かれるところではないかと思いますし、逆に、選定調査委員会の報告では、折り込みページが扱いにくいのではないかという意見もございました。

そんな中で、光村図書か開隆堂出版のどちらかの教科書が使いやすいのではないかなというふうに思いました。

私からは以上です。

ほかに何かご発言はございますか。

（発言する者なし）

山田委員長

ちょっと休憩します。

午前１１時５６分休憩

午前１１時５７分再開

山田委員長

では、再開いたします。

ありがとうございました。

委員の皆さんの意見をお伺いするとともに、教科書採択基準からすると、光村図書が最適であると思いますので、美術につきましては光村図書を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

山田委員長

それでは、ご異議ございませんので、美術は光村図書を採択候補とすることといたします。

ちょうど12時、時間がまいりました。以上で、本日予定した議事は終了いたしました。残りの種目につきましては、本日午後１時から教科書採択についての臨時会を開会いたしますので、よろしくお願いいたします。

これをもちまして、教育委員会第２回臨時会を閉じます。ありがとうございました。

午前１１時５８分閉会